



やも旧聞に属するが、昨年暮れ二十五年ぶりにベートーベンの「第九」を歌った。新潟交響楽団と一般公募の市民合唱団による手作りの「第九」といっ

初の試みに参加したのである。転勤族の私の新潟勤務の良い思い出にと思ったからである。

学生時代合唱団に所属し「第九」も二度歌っている。多少自信をもって練習に参加した。

ところが、社会人になってからはエコー頼りのカラオケしかや

に年のせいかなかなかドイツ語の歌詞が覚えられない。一時は

「第九」奮戦記

「フロイデ」は「風呂(ふうろ)出で」、「ダイネ」は「大寝」などを音訳して覚えようかと思

うな拍手が起った。その時、予想もしていなかった熱い感動がこみ上げてき、思わず涙が出そうになった。そしてカーテン

譜というの
低いし、暗
前日の練習で声をからしてしま
った石丸先生の熱意に引っ張ら
れるように皆も燃えた。最後の
クライマックスを思い切り歌い
終わった。途端に会場割れるよ

平山 征夫 (日本銀行 新潟支店長)

った市民が集まって練習してきた熱意が客席にも伝わったのだらう。

この日の演奏は後日ラジオ放送され、その最後に演奏直後の感動を伝える私の声が入っていた。恐らくこの放送の録音テープは、その夜飲んだビールの味とともに私の新潟勤務の大切な思い出になることだろう。かくして、わが中年コーラス隊奮戦記は終わったのである。

そして思った。その街の文化は、立派なホールがあるなしより、そこに心の感動を求めて集まる市民がどれだけいるかで決まるのではと。頑張れ、音楽都市新潟！

「晴雨計・その後」③

「第九」奮戦記

平山 征夫

初夏のような気候が続く折、年末恒例の「第九」の話を書くのも涼感があつて良い。第九はその後続いて昨年末で二十五回を数えた。その間、知事時代歌えなかったこともあるが皆勤に近い出場ぶりだ。良く続いたなと思うが、私は皆に「百回まで続けよう」と言っている(私は勿論歌えないのだが・・・)。

と訊かれて、「音の良いホールとコンサートの主催はどうでしょう」と提案、前者は「第四ホール」として実現した。後者については、駄じゃれ好きの習癖でつい「『第四の第九』というのも粹ですよ」と進言した。こうして始まったコンサートのチラシには「第九ごだいし」とあつた。この第九も十回でスポンサー・第四が降りることになった。慌てたオケと合唱の幹部が知事公舎に押しかけ「どうしよう」となった。そこで私は「自主公演にしよう。毎年合唱に参加する市民が三百人以上いるのだから、皆が出演料を払い、チケットを完売すれば何とかなるだろう」と提案した。「by 市民」に

なるのはむしろ望ましいと思つた。そして自主公演に切り替えて昨年末で十五回になった。この二十五年間色々な奮戦記があつた。初めからの仲間で、当時大学卒業前のピアノ伴奏者Iさんを食事に誘えと私をけしかけたKさんは、病院を抜け出てコンサートに来たが歌えず、最後がんで亡くなった。もっと歌いたかつたらう。そのIさんは結婚し2児の母になった今も教員の傍ら素敵な伴奏をしてくれている。

に引き渡そうという運動)は、退任後は県のサポートがなくなり、今は細々と続いている状態だが、この二つの百年運動が私の死後も続いてくれることを心から願っている。知事の最後、栃尾での植樹祭で生まれたばかりの赤ちゃんを抱えたお母さんが「知事さん、この子が見届けます」と言ってくれた。そして昨年の第九では小学五年の男の子がお母さんと参加した。「百回目の時、君は八十六歳だ。それまで続けてね」とお願いした。その子の歌っているパートを見たらソプラノだった。おんぼろバスの私はいつまで第九と奮戦出来るのだろう!